

JF 日本語教育スタンダード「みんなの Can-do サイト」を用いた

レベルチェックテストの作成

磯村 一弘、三矢 真由美
国際交流基金ケルン日本文化会館

要旨

国際交流基金ケルン日本文化会館では、日本語での課題遂行能力養成を重視する日本語講座を運営している。そのクラス分けのため、学習者の日本語での課題遂行能力を JF 日本語教育スタンダード=CEFR の基準に基づいて測定するレベルチェックテストを、「みんなの Can-do サイト」を用いて作成した。具体的には、「みんなの Can-do サイト」から Can-do 記述文を選び出し、その Can-do が遂行できるかどうかを測るために、「会話」ではロールプレイを、「読解」では読解問題を作成した。「作文」はどの受験者にも同一のタスクを与え、Can-do に基づいて作成した評価基準表を使ってレベルを判定した。「自己評価」は Europass Language Passport の自己評価表を用いた。以上 4 科目を総合してレベル判定を行った結果、適切なクラス分けを行うことができ、「みんなの Can-do サイト」が日本語での課題遂行能力を測る試験の作成に、有効に活用できることがわかった。

【キーワード】 課題遂行能力、CEFR、試験、評価、ロールプレイ

1 背景

国際交流基金ケルン日本文化会館日本語講座では、「JF 日本語教育スタンダード 2010」(<http://jfstandard.jp/> 以下、JF スタンダード)の公開にともない、既存のコースを JF スタンダードに基づいた講座へと改編する作業を進めてきた。まず、初級から上級までの 9 つのクラスのレベル記述を、JF スタンダードが用いている CEFR (Council of Europe 2004) の基準に従って再定義した。次に、各クラスのレベルに合った Can-do による授業目標を、「みんなの Can-do サイト」を用いて設定した。現在はこれに基づき、課題遂行型の授業を行っている(磯村・三矢 2010)。

その一方で、クラス分けを行うためのレベルチェックテストは、旧日本語能力試験の過去の問題を用いて作成された筆記試験であった。これは主に言語知識を測るものであり、クラスの目標である口頭能力を含む総合的な言語運用力を判断するのに適しているとは言えず、またクラスのレベル記述に用いている CEFR/JF スタンダードの基準とも合っていなかった。そこで今回、JF スタンダードの「みんなの Can-do サイト」を用いて、課題遂行能力を CEFR の基準によって測るレベルチェックテストを新たに開発することにした。

2 「みんなの Can-do サイト」

「みんなの Can-do サイト (<http://jfstandard.jp/cando/>、以下「Can-do サイト」)とは、JF スタンダードの発表とともに 2010 年に公開された、WEB 上のツールである。日本語を使

ってどんな場面で何がどのくらいできるかを、レベルごとに「～ができる」という Can-do の形で具体的に記述した文が、データベースの形で提供されている。言語習熟度のレベルは CEFR のものを採用し、A1～C2 までの 6 段階に分かれている。Can-do には 2 種類あり、CEFR の例示的能力記述文 (CEFR Can-do) と、国際交流基金が独自に作成した Can-do (JF Can-do) が収められている。JF Can-do は CEFR Can-do を参考にしつつも、より日本語学習の場面に合うように、そして場面や状況がより具体的に記述されている。

ユーザーは Can-do をレベル、トピック、言語活動など様々な条件で検索することができ、サイト上の自分のフォルダに保存することができる。また既存の Can-do を参考にし、各現場の状況に合うようなオリジナルの Can-do (MY Can-do) を作ることもできる。

3 レベルチェックテストの作成と実施

新たに開発したレベルチェックテストは、話しことばによる相互行為における運用力を測る「会話」、書きことばによる受容能力を測る「読解」、書きことばによる産出能力を測る「作文」の 3 科目とした。

以上の 3 科目の他に、受験者自身による「自己評価」も加え、それらを総合的に判断して最終的なレベル判定を行った。

各科目のテストの概要、具体的な作成手順、評価法は、以下の通りである。

3.1 会話テスト

3.1.1 テストの概要と作成手順

会話テストは、話す能力、聞く能力、およびそれら 2 つが含まれる他者とやりとりする能力を総合的に測ることができるロールプレイ形式とした。

まず「Can-do サイト」の言語活動「相互行為 (やりとりする)」>「話しことば」にある JF Can-do から A1～B1 レベルのものをいくつか抜き出した。次に、これをロールプレイの課題として記述し直した。例えば、A2 の JF Can-do 「デパートの店員に、店頭に出ている衣料品の他の色やサイズがあるかなどについて質問し、いくつかの簡単な答えを理解することができる」という記述文から、「あなたは日本のファッション店で、とてもいい色の服を見つけました。しかし、サイズが合いません。店の人に相談してください」というロールカードを作成した。

3.1.2 テストの実施と評価方法

ロールプレイは試験官と受験者が一対一で行った。課題はドイツ語のロールカードで受験者に提示した。どの受験者にも最初に A1～B1 のうち中間のレベルである A2 のロールプレイを行い、タスクが達成できていないと判断された場合は次に A1 のロールプレイを、タスクが達成できたと判断された場合は B1 のロールプレイを引き続き行った。それぞれのレベルには複数のロールプレイが用意しており、一つのロールプレイで判定が難しい場合には、必要に応じて同じレベルのロールプレイを複数回行うなどした。時間は平均して一人 5 分程度であった。

ロールプレイの評価は、タスクが十分に達成できた場合には○、タスクは何とか達成できたが非常に苦勞していた場合や、もう少しで達成できたなどの場合には△、明らかに達成できなかった場合には×とした。評価の際に最も重視したのはタスクの達成度であった

が、それに加えてタスクがどのように達成できていたかを見るために、CEFR の「共通参照レベル：話しことばの質的側面」の記述を参考に、質的側面も同時に評価した。

3.2 読解テスト

3.2.1 テストの概要と作成手順

読解テストは、まず「Can-do サイト」の言語活動「受容（理解する）」>「書きことば」にある A1～B1 の JF Can-do をいくつか抜き出した。次に、それぞれの Can-do のタスクに合う読解文を用意した。例えば、A1 では「お店やレストランの前にある情報や表示を見て、営業時間や定休日など、ごく基本的な情報を探し出すことができる」という JF Can-do を選び、読解文としてそば屋の看板を提示した。

それぞれの読解文の後には、内容に関する問い（正誤問題や選択問題）をドイツ語で与えた。例えばそば屋の看板を使った読解では、そば屋の営業時間や定休日などに関する問いをドイツ語で与え、○か×を記入するよう指示した。設問は、それぞれの Can-do で求められるタスク（大まかな理解、情報取り、詳細理解など）に合わせて、それが確認できるものを設定した。

3.2.2 テストの実施と評価方法

どの受験者にも、A1～B1 までのすべてのレベルの読解問題を課した。設問に対する正答率によって、そのレベルの読解タスクが達成できたかどうかを判断した。

3.3 作文テスト

3.3.1 テストの概要と作成手順

「作文」では、それぞれのレベルのタスク達成度を別々に問う複数の課題を課すことが試験時間の制約の中では難しかったため、全ての受験者に同一のタスクを一つ与えることとした。A1 レベルの受験者でもできるタスクであること、同一のタスクで幅広いレベルを判断できることという条件から、タスクは自己紹介文とした。受験者のレベルを適切に判断する言語材料が十分得られるようにするため、「あなた自身のことについて、できるだけ詳しく書いてください（例：仕事、家族、住んでいるところ、趣味、性格、関心のあること、経歴）」と指示した。指示はドイツ語で与えた。

3.3.2 テストの実施と評価方法

作文を客観的に評価するために、「Can-do サイト」を使って評価基準表を作成した。まず「Can-do サイト」の言語活動「産出（表現する）」>「話しことば」>「作文を書く」のカテゴリーにある A1～B2 の JF Can-do および CEFR Can-do を選び出し、これらをもとに、この課題を評価するための MY Can-do を作成し、評価基準とした。例えば B1 の評価基準は「自分の経歴や性格、趣味、住んでいる町の様子など、身近な話題について、ある程度詳しく書くことができる。短い文をひとつの流れに結び付けながら、ある程度の長さで順序立てて書くことができる」とした。これらの評価基準に受験者の作文を照らし合わせ、適切なレベルを特定した。

3.4 自己評価

「自己評価」は、Europass Language Passport のドイツ語版をそのまま使用し、「理解する

（聞く／読む）、「話す（やりとり／産出）」、「書く」の5つの技能について、自分が日本語で何がどの程度できるかを受験者自身にチェックしてもらった。

4 最終判定

以上、レベルチェックテストの3科目「会話」、「読解」、「作文」と、「自己評価」を合わせ、総合的に受験者のレベルを判定し、クラスに振り分けた。

表1は、各科目の評価と、最終判定（「お勧め」）を示している。最終判定は、受験者に最も適したクラス「お勧め1」と2番目に適したクラス「お勧め2」を提示した。

例えば表最上段の受験者の場合、「口頭（やりとり）」ではA1で○、A2で△という評価になっており、ここから会話力を判断すると、現在最も適したレベルは、広い場面でA2のコミュニケーションを目指すクラスとなる。一方、書きことばを見ると、「読解」ではB1でもタスクが達成できており、また「作文」でもA2という判定になっている。さらに受験者自身が自分の能力をA2～B1と評価していることも考慮に入れ、最終的にはA2の達成を目指すクラス（Stufe4）を「お勧め1」とし、A2を確認しつつ、B1でできるタスクも徐々に増やしていくことを目標とするクラス（Stufe5）を「お勧め2」とした。

	読解			作文	口頭(やりとり)				自己評価	お勧め	
	A1	A2	B1		A1	A2	B1	質的側面		1	2
	○	△	○	A2	○	△	×	A2	A2(B1)	S4	S5
	○	△	×	B1-	-	○	△	A2+	A2(B1)	S5	S6
	△	△	×	A1+	△	×	-	A1+	A1/A2	S2	S3
	○	△	×	A2	○	×	-	A1+	A1/A2	S3	S2
	○	△	○	B1	-	○	△	B1-	B1	S7	S6
	○	△	○	B1	-	○	○	B1+	A2/B1	S7	S8

表1 最終判定表

5 結論と今後の課題

5.1 新レベルチェックテストの効果

レベルチェックテストを課題遂行能力重視のテストに変えた結果、これまでの筆記試験と比較して、クラスのレベル記述にあったクラス分けをより適切に行うことができるようになった。特に以前は、言語知識はあるが口頭能力の低い学習者が実際のレベルよりも上のレベルのクラスに割り振られ、クラス内での教室活動についていけないことが時々あったが、レベルチェックテストが新しくなってからはこのようなケースは見られなくなった。以上のことから、新テストは口頭能力を含む総合的な言語運用能力に基づいて学習者を適切なクラスに割り振ることができることがわかった。

さらに新テストの副次的効果として挙げられるのが、レベル判定に透明性が出て、受験者に説得力のある説明ができるようになったことである。新テストはクラスのレベル記述に一致しており、かつ受験者の現在の能力が科目ごとに示されるため、受験者の現在の能力がどの程度で、どんな能力がどの程度足りないのか、したがってどのクラスに参加すれば効果的に学べるのかを客観的に示せるようになった。

5.2 JF 日本語教育スタンダード「みんなの Can-do サイト」の有効性

今回「みんなの Can-do サイト」を使ってレベルチェックテストを作成してみて、同サイトが以下のような利点を持つことがわかった。

①学習者の日本語レベルを CEFR 基準に基づいて判断できる。

学習者の能力を CEFR 基準で判断する場合、これまでは A1～C2 までの言語熟達度だけを頼りに「この学習者はたぶん A2 ぐらいだろう」と感覚的に判断してしまいがちであったが、Can-do サイトの具体的で現実場面に即した Can-do に照らし合わせることで能力を客観的に判断できるようになった。

②運用能力を測るテストを短時間で簡単に作成できる。

CEFR を評価や授業活動に導入する場合、膨大な能力記述文を読み解き、さらに抽象的な記述を具体的な場面や状況に記述し直す必要があるが、Can-do サイトを用いれば様々な条件をもとに具体的な Can-do を検索することができ、短時間で簡単にテストを作成することが可能になった。

5.3 今後の課題

1 つ目に、「読解テスト」の難易度が漢字の量に大きく影響されるという点が挙げられる。今回、A2 のタスク「看板から必要な情報を読み取る」のほうが B1 のタスク「Eメールの内容を理解する」よりも難しくなるという現象が見られた。日本語の場合、こうした文字の問題をどう扱うかが課題である。

2 つ目に、今回のテストでは、受験者の過去の能力分布を考えて A1～B1 までを判定できるものとしたが、B1 以上の受験者もいたことから、全ての受験者の能力を正確に判定するためには、将来的には B2 以上のタスクを作る可能性が考えられる。

最後に、技能によってばらつきがある受験者をどう扱うかという点がある。今回、技能ごとの試験を実施したことによって、各受験者の技能ごとの能力のばらつきが明らかな形で示さることになった。例えば、滞日経験があり流暢に話せるが、ひらがなが満足に書けない受験者をどのクラスに振り分けるか等は、難しい問題である。

今後は、以上の点を解決できるよう、さらに講座の改善を進めていきたい。

<参考文献>

- Council of Europe (2004) 『外国語教育 II—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』吉島茂、大橋理枝（訳、編）、朝日新聞社
- 磯村一弘、三矢真由美 (2011) 「みんなの Can-do サイト」を利用した初級講座シラバスの改訂—CEFR から JF 日本語教育スタンダードへ—、第十回日本語教育研究世界大会（天津外国語大学）、『異文化コミュニケーションのための日本語教育』2、pp.248-249、高等教育出版社

<参考 URL>

- Europass Language Passport <http://europass.cedefop.europa.eu/> (2012 年 2 月 10 日)
- JF 日本語教育スタンダード <http://jfstandard.jp/> (2012 年 2 月 10 日)
- みんなの Can-do サイト <http://jfstandard.jp/cando/> (2012 年 2 月 10 日)